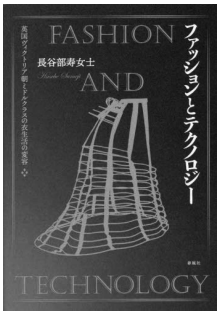
書　評

長谷部寿女士著『ファッションとテクノロジー——英国ヴィクトリア朝ミドルクラスの衣生活の変容』
（春風社、2021年）



坂井　妙子（日本女子大学）

刺激的なタイトルの本書は、ヴィクトリア朝の大衆ファッションをテクノロジーの進歩から探った力作である。第一部「ファッションアイテムにおけるテクノロジー」では19世紀半ばの女性ファッションに欠かすことのできないクリノリン（1860年代初めに最大の大きさに達した腰枠）、カシミア・ショール（贅沢な輸入品だったが、機械化によって大衆衣料へと変遷を遂げた外出時の羽織りもの）、バッスル（1870年代以降のスタイルに大きな影響を及ぼした、後ろ腰につけるファンデーション）の技術的変遷とその大衆化が女性の服装意識に及ぼした影響を精査している。第二部、「衣服製作過程におけるテクノロジーと、衣生活の変化」では、衣服の「作り手」に目を向け、ミシンと型紙（パターン）の発展が衣服製作のプロセスにどのような変革をもたらしたかを考察している。ミシン、パターンともに、イギリスの服飾史では扱われることが比較的少ない領域である。第3部、「反装飾によるテクノロジー」では、主に「唯美主義ドレス」と服装改革が論考される。技術の進歩によって可能になった派手な装飾だが、「イギリス」のファッションの消費者はそれに異を唱え、衣服改良運動と連動することで、イギリス独自のファッションを生み出していった。各部、数章から構成され、いずれも当時の女性の衣生活に関わるテクノロジーの発展を重層的に考察するところに、本書の醍醐味はある。

本題に入るまえに、長谷部が論じる「テクノロジー」について多少説明しておく。この語は、当時の大衆ファッションの主要消費者であるミドルクラスの女性たちが耳にし、ファッション誌等で頻繁に目にしたであろう範囲と精度の、衣服に関する技術を指している。これは参照した文献が『イ

ングリッシュウーマンズ・ドメスティック・マガジン』、『レディース・トレジャリー』など、広く購読されていたファッション誌であること、また、マニュアル本を中心に考察を重ねているためである。マニュアル本とは、「ミドルクラス」に属すと自認する人々の多くが、日常生活を営む上で参照したハウツーもので、彼女たちの行動規範を形成した。したがって、長谷部は、当時の一般読者にはほとんど興味がない、または理解不能と思われる技術の細部について、大方説明を省いている。たとえば、アニリン染料（化学染料）の技術的変革はすでに詳細がわかっており、使用された機器の構造まで明らかになっているが、そのような説明はしていない。また、現物資料もヴィクトリア・アンド・アルバート美術館の所蔵品を中心に、比較的広く知られたものを使っている。しかし、本書の主眼がヴィクトリア朝中期から後期のイギリスにおける大衆ファッションの発展と、それを消費する女性の意識（改革）であることから、適切な取捨選択とみるべきであろう。

逆に、服飾関係の第二次資料に関しては、読みの広さに感服する。本書は2019年に筑波大学に提出した博士論文を元にしているということだが、新旧の先行研究（どこをどのように探せば出てくるのかわからならいほど、珍しいものも多数ある）を徹底的に読み漁り、適切に配置する技量はすばらしい。このように、噛み砕かれた個々のテクノロジーの解説を読み解き、先行研究を精査することで考察を組み上げた結果、読者は、当時の一般読者と同じ視点に身を置いてテクノロジーの進歩を追体験できる。さらに、服飾史が積み重ねてきた独自のパースペクティブにしたがって、ヴィクトリアン・ファッションの新たな側面を体得することもできる。

では、各章の内容を紹介する。先述の通り、第一部ではスカートのシルエットを形作るファンデーション2種と、特にクリノリン流行時に広く着用されたカシミアの模造ショールを考察している。ファンデーションの一つであるクリノリンを考察する1章で特に興味深かったことは、鉄道の発達とクリノリン改良の関係である。19世紀半ば以降、鉄道の発達とともに、ミドルクラスの間でも旅行がブームになるが、移動の際、邪魔になったのがかさのはるクリノリンだった。鉄道自体、19世紀最大の技術的発明と言えるが、それを使った大衆的な旅行が、階級の上下を問わず身につけられ

たクリノリンの技術的な改良に結びついたのである。具体的には、「立ったり座ったりの頻度が多い外出時の不便を考慮して生まれ」た、「お尻の部分が空洞になっているクリノリン」や「後ろの部分だけの蛇腹式に折りたためるクリノレット」(p. 55) がパテントブックの挿絵とともに紹介されている。さらに、旅行時には、「実用的かつ見栄えの良い服装」(p. 57) が求められたとして、装飾過多を否定したイギリスらしい衣服 (第3部で取り上げる) の準備も怠っていない。続く第2章では、カシミアの模造ショールをデザイン教育との関係から捉えた点で新鮮である。イギリスでは遅れていたデザイン教育だが、色彩、意匠とそれを織り上げる技術が一体となって、「模造品ショールはむしろ本物のカシミア・ショールのデザインよりもファッショナブルにさえなって」(p. 89) いったという。

第二部では、家庭裁縫を一新させたミシンと、素人にも扱うことができる (とはいえ、プロの手解きが必要) パターンを考察するが、実はミシンが「インテリアとしての役割」(p. 154) を持つことで、ミドルクラスの家庭に受け入れられたとする説明には説得力がある。本来、ミドルクラスを自認する家庭では、女性は労働しない。自分の衣服を作ると公言する場合でも、機械を使って本格的に短時間で仕立てることができるミシンの使用、おそらく長期に及ぶ使用は、精神性を重視するミドルクラスの温かい家庭像とそりが合わない。それどころか苦渋労働さえ思わせる。しかし、全ての「リスペクタブルな」女性が持つ裁縫箱に代わるものとしてインテリアになることで、ミシンは家庭的とみなされ、「妻のシンボル」(p. 154) にもなりうると長谷部は主張する。もちろん、昔ながらのお針子から仕事を奪うことになるミシンの出現は、家庭外でそれ相応の軋轢を生んだ。それでもなお、既成のパターンも利用することで、手間のかかる衣服製作が徐々に簡略化されたのである。

第3部では、美学と個性の考え方を導入し、ラファエル前派にはじまる「唯美主義ドレス」が19世紀末の服飾論 (主に、ホイス夫人の著作数点から) に支えられ、発展していく様が考察される。ラファエル前派は中世の生活様式、態度を規範にした芸術家集団なので、一見するとテクノロジーとは縁遠いが、「唯美主義ドレス」の商品化を先駆けたリバティー商会の生産工程におけるテクノロジーと結びつくことで、その難を免れている。そして

第7章、「衣服改革運動の中のドレスにみるテクノロジー――針からはさみへ」では、19世紀イギリスの衣服研究では定番である女性服の改良運動を再考する。オリファント夫人の服飾論の分析に、テーラーメイド（男性服に倣って仕立てたジャケットと、装飾なしのスカートの組み合わせ）や乗馬服、合理服協会提案の下着の紹介まで加え、衣服とは夜会用のドレスだけではなく、さまざまな場面や用途で着用する服装全体を指し、それらすべてが何らかの形でテクノロジーの発展に支えられ、ミドルクラスの美意識の改革――「快適さ」の追求、「美」と「用」を兼ね備えること――に貢献したことを示している。

個人的には、第1部3章で取り上げたショッピングの変化も興味深かった。ヴィクトリア朝のデパートの発達に関しては、エリカ・ダイアン・ラパポートの『お買い物は楽しむため』（彩流社、2020年）（原題 *Shopping for Pleasure*, 2000）で言い尽くされた感があるものの、当時の小説には、ロンドンの有名デパートが頻繁に登場し、その描写と長谷部の説明を照らし合わせて読むと楽しさが増す。たとえば、H. G. ウェルズ作『透明人間』（1897年）では、性悪な主人公、透明人間がシュールブレッズと思われるデパートで一夜を明かし（第22章「百貨店にて」）、G. B. ショーのヒット作、『ピグマリオン』（1913年）では、ホワイトリーから電話注文で取り寄せたドレスをイライザが着る（第2幕）。シュールブレッズは1820年代、30年代にもっともファッショナブルな通りの一つだったトッテナム・コート・ロードに開店した老舗デパートであり、1863年創業のホワイトリーは、創業者の度重なるスキャンダルと派手な販促でイギリス中を沸かせた新興百貨店だった。百貨店としてはめずらしく、ウエストエンドから外れたベイズウォーターに店を構えていた。長谷部がこれらの小説に言及することはないが、モノの消費を介しての小説の描写は、特にそれが実在する場所ならばなおさら、印象は鮮烈になる。そして、著者の意図を探りたくもなる。長谷部の著書は、文学研究の参考書としても示唆に富む。

総じて、第1部、第2部では、テクノロジーの進歩とともに女性服が装飾化していく過程を論じ、第3部では、このような装飾過多に対する反動が、やはりテクノロジーの進歩を糧に進むと長谷部は主張する。しかし、先に述べた通り、第1部の1章においてすでに、旅行服など簡素な服の流

れを押さえることで、第3部に向けて無理のない準備がなされている。要するに、テクノロジーの進歩がミドルクラスの女性服の製作と衣服に対する考え方を変えたわけだが、長谷部によると、それは「手の経験」を重視し、自分で仕立てることを可能にし、それを良しとする方向へと向かった。テクノロジーを駆使しながらも、自分の手でつくる、それが個性を生み出すとする結論に、アイロニーを読み取らずにはいられない。イギリスらしい展開も楽しめる好著である。